箪笥の歴史

●箪笥の発生は江戸時代

日本の代表的な収納家具と言えば、箪笥を思い浮かべますが、その発生は意外に新しく江戸時代（一六〇三～一八六七）初期といわれています。

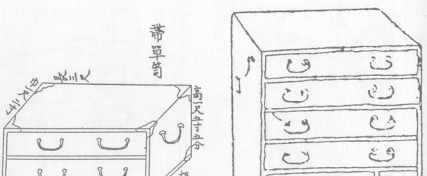
それまでの庶民は抽斗のある箪笥を必要とするほどの衣装や物を持っていなかったからであろうと思われます。庶民はつづら、長持ちといった箱型の収納具に、様々な家財道具を入れていました。

戦国時代から、諸大名が富国強兵に力を入れ、次第に木綿を初めとする生産力が増大し、また、庶民の生活も向上していきました。延宝元年（一六七三）に三越の前身である越後屋が日本橋に店を開店し、これ以後大衆相手の衣類店が増えていき、庶民も多くの種類の衣類を持つようになりました。

さらにこのころより桐や杉・檜といった木材の流通体制や製材技術も進歩してきました。板材が安価で大量に手に入らなければ、箪笥は作ることが出来ません。世の中に材木屋が増え、そこから材料を仕入れて加工する箪笥屋が現れた江戸時代中期以降、箪笥は次第に普及していったのです。

また、明暦三年（一六五七）の江戸の大火で家々から引き出された車長持に火がついて大惨事になったことから、天和三年（一六八三）に江戸・大阪・京都の三大都市では車長持が禁止されました。ここから箪笥の時代が始まったともいえます。

しかし、江戸時代の箪笥は種類も少なく、大半が衣裳を入れる小袖箪笥と呼ばれるものでした。他には、帯を入れる帯箪笥、茶道具を入れる茶箪笥、菓子を入れる菓子箪笥、建物と一体につくられている部屋箪笥、土蔵のなかで使われる倉箪笥、階段の裏の空間を利用した箱階段などがありましたが、まだまだ商店や裕福な家の家具にすぎませんでした。



帯箪笥（婚礼道具図集）　小袖箪笥（和漢三才図会）

用材は、杉、檜、檜などでしたが、運搬に便利なように、江戸時代中期以降軽くて通気性の良い桐が次第に使われるようになりました。運搬用ですから、あまり背は高くできませんでした。桐箪笥といってもすべてが桐材ではなく、全面や表面にだけ桐を使用し、側板や底板は杉材などが使われました。

●大正時代に庶民に定着

箪笥が、本当に一般庶民のものとして全国各地に普及するのは、明治時代（一八六八～一九一二）中期以降です。工業化が進展して材料、工具などが飛躍的に進歩し、さらに流通機構が全国的に設備されたためです。明治以降、衣装箪笥、整理箪笥、洋服箪笥な